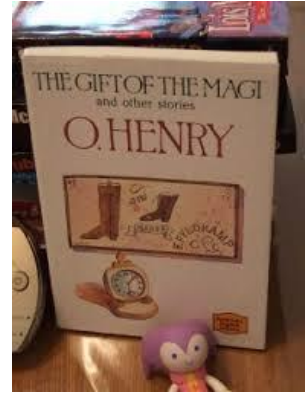


## 26期生の皆様ー12

最近5時過ぎにはもう暗くなります。古代人はこの時期に昼が日に日に短くなるのを恐れ、冬至になって今度は日が長くなり始めるとほっとしたようです。ローマ帝国に広がったミトラ教という宗教では一年で一番昼が短い日を、太陽の神の誕生日として祝っていたのですが、キリスト教徒はその日をキリストの誕生日として祝うことにしたそうです。

さて、新約聖書の中心はイエス・キリストの言行を記録した福音書です。福音とは「よい頼り」という意味で、当時はローマ皇帝の命令が福音と呼ばれたようで、弟子たちはイエスの生涯と教えこそよい頼りだと理解したことがうかがえます。今日はこの福音書の歴史性という、18世紀末に始まる大論争を簡単に紹介します。



前回見たように、イエス・キリストについての最大の資料は四つの福音書です。これらの福音書には、イエスが頻繁に奇跡や予言を行い、最後には十字架にかけられ三日目に復活して弟子たちから神と崇められるようになったと書かれています。18世紀の後半になると、ドイツで「ナザレのイエスは奇跡や予言などの超自然的な行動はしなかった。それらは初代教会の信者たちがでっち上げたことだ」として、現実に存在したイエス（これを歴史のイエスと呼ぶ）と、初代教会が信じた神なるキリスト（これを信仰のキリストと呼ぶ）を区別し、神学者のすべきことは「福音書に登場する信仰のキリストから、初代教会の創作の部分をそぎ落とし、歴史のイエスを見つけることだ」と小声で唱える人が現れました。福音書を単なる本とみて、そこに書かれてあることを調べていこうとする態度を高等批判と言います（批判とは非難することではなく、吟味するということです）。

この考え方の大前提（出発点）は、奇跡や予言などの超自然的現象は存在しない、すなわち超自然の否定です。この裏にあるのは理神論という考えで、「神は存在し、この宇宙を造ったが、それ以降宇宙は自然法則にきっちり従って動いていく。神がこの自然界に介入することはない」というものです。もしそうなら、奇跡や予言はあり得ない。聖書に出てくるそのような話しはみな初代教会の創作である、とするのです。（でも、どうしてそんなに簡単に超自然はないと断言できるのでしょうか）。

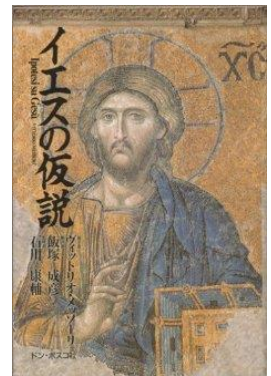
さて、この高等批判はドイツで発展し、様々な学者が福音書をまさに切り刻んで「これは創作部分、これは本当」などと言って取捨選択しながら、せっせと自分の好みに合う「歴史のイエス」を発見（というより発明）していきました。

いくらかの説を紹介します。「“たぶん” イエスは放浪の説教師にすぎなかった。それが色々な要素をつなぎ合わせた結果、神の子と考えられるようになった」。「たぶん” 彼はある種の先覚者で、妄想に取り付かれ、自分がユダヤ人待望のメシアであると宣言した。その上、彼と同類の者たちは彼を信じ、その妄想を広めるため共同体を作った」。「“たぶん” 彼の信者たちは素朴でだまされやすい者たちで、イエスが明らかに豊かに持っていたカリスマ性に動かされたが、イエスが死んだとあきらめきれず、死者の中からの復活を宣言した」（メッソーリ、『イエスの仮説』、191~192頁）。このほかにイエスを政治的革命家とする説や、イエスは神がみな父であることを教える以外は何もしなかったという説もあります。

このように高等批判が混乱の極みに達したので、次には神話説というのが現れました。初代教会は古代の神話をもとにしてイエスの物語をつくりあげたのだ、と言うのです。例えば、キリスト教以前の神話に「神々が人となり、苦難に会い、人類の救済のために死ぬという言い伝えがあった。初代教会は、この大昔の神話をイエスという人物に当てはめ、イエスが苦しみを受けて死にそして死者の中から復活した」という宗教を作り上げた、というものがあります。過激な人はイエスの実在も否定しました。つまり「歴史のイエス」も神話から作られた架空の人物だと。

歴史学と歴史小説は違います。小説の方が学問より面白いのが普通ですが、真実を語るかどうかは別です。神話説は学問ではなく、小説だと言えます。あるいは、彼らの結論こそ神話であると言えるのではないのでしょうか。学問ならちゃんとした証拠（歴史の場合は史料）を示して結論を証明するのですが、上の理論にはその証明がありません。

高等批判にも同じ反論が出せます。以前少し紹介したように、イエスについては非キリスト教徒の史料があり、それらは、イエスが存在し、十字架刑で死に、復活したとして崇められるようになったことを伝えています。イエスが神として崇められるようになったという事実を示す、最も古い文書はパウロの書簡です。すでに50年頃にはイエスは神として信仰の対象となっていたことを示します。この事実は、パウロの書簡がキリスト教側のものであることによって、なんら価値を失うものではありません。



高等批判も神話説もイエスを神だとする信仰は初代教会がでっちあげたものだという点では一致します。しかし、もしイエスは普通の人間であって、それを初代教会の信者が神に仕立て上げたのなら、パウロが手紙を書いた50年頃というのは、まだまだイエスを目撃した人がたくさん生きていたことを思い出す必要があります。「使徒と彼らの周囲に作られた原始共同体が、すこしでも真実から離れたことを教えたり書いたりしたら、彼らは自らの手で墓穴を掘ることになったであろう。というのは、当時のパレスチナにはイエスを知っていた人が大勢おり、イエスについての作り話はどんなものでもすぐにばらすことができたに違いないからである」（『イエスの仮説』320頁）

そもそも、もし初代教会が「イエスが神である」ことをでっち上げたのなら、信者たちは一体何のためにそんなことをする必要があったのでしょうか。イエスが神だと言って新しい宗教を始めることで、どういう利益があったのでしょうか。最初の頃の教会のリーダーたちはほとんど殉教しているのですが、自分たちが嘘の宗教をでっち上げて、そのために死ぬというのはばかげていませんか。

あるいはもしイエスが革命家であったなら、そういう革命家は当時ユダヤにたくさん出たのですが、なぜイエスだけが神に仕立て上げられ、しかもその宗教が世界中に広がったのでしょうか。

あるいはもしイエスが神の愛を説くだけで奇跡もなにもしなかったのなら、なぜユダヤ人の指導者たちは彼を十字架刑にかける必要があったのでしょうか。これらの疑問を解決するのが、福音書には本当にあったことが書いてあることを、つまりその歴史性を認めることではないのでしょうか。20世紀末からの研究はそちらに傾いているようです。次回も、この問題を続けたいと思います。

それでは、鳥インフルエンザやエボラ出血熱にはくれぐれも注意して、勉強に励んで下さい。よいお年を。（『イエスの仮説』の他に岩下壮一、『カトリックの信仰』講談社学術文庫も役に立ちます）。